Plectrum Music Institute

MANDOLIN MUSIC LIBRARY
BIBLIOTECA MUSICALE PER MANDOLINO

マンドリン音楽資料館
開館5周年記念演奏会

CONCERTO PER
CELEBRAREIL 5° ANNIVERSARIO DEL
BIBLIOTECA　MANDOLINO



旧東京音楽学校奏楽堂

2024. 10.27 (日)

Domenico, 27 ottobre, 2024 18:15

主催:NPO法人プレクトラム音楽研究会
協賛:一般社団法人日本マンドリン連盟
後援: 絃楽器のイグチ

プログラム

❊ ❊ ❊　第1部　❊ ❊ ❊

マンドリン独奏：廣本茉夕
(第28回日本マンドリン独奏コンクール 第1位/2023)

第二幻想曲, “Fantasia 2º in Re minore”, Op. 43 (1926/1944)　中野二郎

夜想曲「星空」　ラッファエーレ・カラーチェ
“Cielo stellato” Notturno, Op.186　Raffaele Calace

「じょんがら」, “Jongara” für Mandoline solo (2002)　桑原康雄

休憩・intervallo

❊ ❊ ❊　第2部　❊ ❊ ❊

マンドリン音楽資料館記念オーケストラ　指揮：小穴雄一

詩的想起「優雅なリュート」(1925)　ロザリオ・ガルガーノ
“Liuto gentile...” Evocazione Poetica　Rosalio Gargano

「無言歌」(1908), Op.84　カロージェロ・アドルフォ・ブラッコ
“Romanza senza parole”　Calogero Adolfo Bracco

水彩画「鶴は飛び立つ」(1929)　フォルトゥナート・スコンツォ
“Partono le gru” Acquarello, Op.14　Fortunato Sconzo

「楽興の時」(1931)　エマニュエーレ・マンデルリ
“Momento musicale”　Emanuele Mandelli

休憩・intervallo

©Plectrum Music Institute, 2024

❄ ❄ ❄ 第3部 ❄ ❄ ❄

マンドリン音楽資料館記念オーケストラ　指揮：横澤恒

行進曲「若人よ」(1937)	橋本國彦 / 中野二郎編曲
「静かな午后」“Siesta” (1916) ～組曲「子供とおったん」より	山田耕筰 / 中野二郎編曲
「丘の教会堂」 (1933/1968) “Iglesia sobre la Colina” , Op.29	中野二郎
組曲「夢の桃太郎」(1921ca.)	山田耕筰 / 中野二郎編曲

1, Prelude “夢路”
2, Minuettino “流の桃”
3, Waltz “誕生の喜”
4, Rondinetto “森のたはむれ”
5, Scherzando diablo “鬼が島”
6, Marcia trionfante “凱旋”



マンドリン独奏：廣本茉夕（ひろもとまゆ）

2002年生まれ。大妻高校マンドリン部第55代コンサートミストレス。2019年度全国高等学校ギター・マンドリン音楽コンクールにて文部科学大臣賞受賞。第27回日本マンドリン独奏コンクール第3位。第28回日本マンドリン独奏コンクール第1位。マンドリンを堀雅貴氏に師事。
C＆Vオルケスタマンドリーノ、マンドリンアンサンブル＊イリスに所属。現在、明治大学在学中。

ご挨拶

本日は第５回目のマンドリン音楽資料館演奏会にお越し頂きありがとうございます。今回は第5回目の記念の演奏会になりますので、特別に有志にてマンドリン音楽資料館記念オーケストラを結成いたしました。

また一般社団法人日本マンドリン連盟様の協賛もいただき、昨年のマンドリン独奏コンクールで見事優勝した廣本茉夕さんを特別ゲストとしてお迎えし、マンドリンの独奏も聴いて頂きます。

マンドリン音楽資料館には膨大な楽譜や資料が集められていますが、取り組みのひとつとして、その中からあまり知られていないマンドリンのための優れたオリジナル作品等を皆さまに紹介することがあります。今回も今まで演奏される機会が少なかった曲も取り上げましたので、ごゆっくりご鑑賞いただきたいと思います。

特定非営利活動法人プレクトラム音楽研究会　理事長　岸本哲郎

©Plectrum Music Institute, 2024

第二幻想曲 “Fantasia 2º in Re minore”, Op. 43 (1927/1930)

中野二郎

作者は1902年愛知県瀬戸市に生まれ、2000年名古屋市に逝いた作編曲家、研究者、指揮者、マンドリン・ギター奏者、指導者。愛知県立工業学校を卒業、名古屋高等工業学校助手となる。初任給で購入したマンドリンに魅せられ独学でマンドリン、ギターを習得した。1928年にはナゴヤ・マンドリン・オーケストラを結成、戦時の中断を挟んで1959年まで指揮と独奏を担当した。また1935年にはクラブ・ドメニカ・マンドリン五重奏団を結成し、1964年までの間にラジオ放送を通じて235回の演奏を披露した。1938年、ギター独奏曲「アリランの主題による変奏曲」が日本人作品として初めて“イル・プレットロ”誌に掲載された。1945年、NHK名古屋放送局管弦楽団の指揮者に選ばれ、1965年までつとめた。

1963年同志社大学マンドリンクラブの講師となり、技術・資料の両面で22年間指導にあたったが、この時期に現在も演奏される数々の作曲・編曲作品が生み出された。 1981年名古屋市芸術特賞受賞、1988年には芸術文化功労者として「勲五等双光旭日章」を受賞した。

1985年に約65年に渡り収集した楽譜、資料類を同志社大学図書館に寄贈、また没後には85年以降も続けられた作曲、研究活動の成果も追加で寄贈され、これは世界に類を見ないコレクションとなった。

本作は「マンドリン・ギター研究」1939年5月号によれば1927年に書かれたとされているが、1999年に中野二郎に直接指導を仰ぎ、独奏曲全曲を録音したゲルトルート・トレスターの解説では1930年の作品とされており、中野二郎自身が1976年に発行した「独奏曲集」に収載された。1988年の第11回日本マンドリン独奏コンクールでは邦人作品として初めて課題曲に選ばれている。単体の楽譜としては手写譜が1977年に岐阜のフレット社から発行されており、前述のコンクールではフレット社版の楽譜が使用された記録がある。現在はドイツのフォークト&フリッツ社から出版されているゲルトルート・トレスター校訂譜が入手出来る。作者の数多い独奏曲において、無伴奏作品は10曲を数えるがその中で演奏機会が最も多いものと考えられる。本作では最大の特徴であるAndante Cantabile alla Chitarraの部分でMano destraと記載された右手のピツィカートの奏法部分に注目いただきたい。

夜想曲「星空」 “Cielo stellato” Notturno, Op.186

Raffaele Calace



作者は1863年12月イタリア、ナポリに生まれ、1934年11月同地に逝いた作曲家、楽器製作者、演奏家。弦楽器商を営むアントニオ・カラーチェの次男として生まれ、ナポリの音楽院を卒業後、兄のニコラと共に家業を受け継ぎ、1911年以降は自身で楽器制作を行なったプレクトラム音楽界に多大な貢献をした忘れがたい存在。作品は約170曲にも及ぶが現在、Federazione Mandolinistica Italiana(F.M.I.)のWEBページにおいて現時点で判明している楽譜が公開されている。1924年には三女の在日イタリア大使との婚礼の為初来日し、併せて東京、京都、名古屋で演奏会を開催、集まった愛好家を熱狂させた。更に皇太子時代の昭和天皇や東伏見宮邸などで御前演奏を披露、勲三等瑞宝章を叙せられ、現在も工房に掲げられている。

本作はカラーチェの無伴奏独奏曲の中で、感傷的で哀切な旋律と技巧的に比較的演奏しやすい事も相まってか、近年多くの演奏家がレパートリーとするようになってきたようだ。作曲年ははっきりしないが、Op.187の“Silvia”が1933年の作品である為、同時期の作品と推察される。

©Plectrum Music Institute, 2024

「じょんがら」 “Jongara” für Mandoline solo (2002)

桑原康雄

作者は1946年12月神戸市に生まれ、2003年同地に逝いた作曲家、マンドリン奏者。比留間きぬ子の最晩年の愛弟子としても知られ、国際的に活躍した人物で特にヨーロッパ圏での評価が高い。1975年に結成したアンサンブル・フィル・ムジカを拠点として作曲、演奏の両面で活動し、1982年にヨーロッパでデビュー、以降アメリカ、ロシア、オーストラリアでも活躍し、作品も独奏、合奏併せて50曲を超える作品がある。1992-2000年にかけて5回開催されたマンドリン系撥弦楽器の世界的なフェスティヴァル、神戸国際音楽祭は彼のライフワークであった。 作品には1985 年スウェーデン政府委嘱のマンドリン協奏曲「籟動」や1989年の作である「初秋の唄」などがあり、現在作品の多くはドイツのフォークト&フリッツ社、トレッケル社から出版されている。ドイツ国際マンドリン独奏コンクールは2005 年以降、桑原氏の功績を讃えて「桑原康雄 国際マンドリン独奏コンクール」と改称され、現在も開催されている。

本作は作曲家でフォークト&フリッツ社の経営者でもあるエルケ・トーバーーフォークトに献呈された作品で、作者の独奏作品の中でも最もダイナミックで技術的体力的に高度な集中が求められる作品。作曲の経緯について桑原は以下のように述べている。

『「じょんがら」は江戸時代のお囃子の一種である「ちょんがれ」という古い言葉に由来する。 この言葉は特に津軽の三味線奏者の間では今でもよく使われている。その昔津軽の三味線奏者たちは、波打ち際で何年も練習して鍛練を重ねた。もちろんこれは非常に過酷な訓練であり、奏者たちは自制心を身につけるために、容赦のない自然との戦いで指を血だらけにした。私の目的は、こうした厳しい禁欲的な練習をやり遂げたときの充実感を表現することだった。』

参考資料：“NAKANO : Jewels for The Mandolin” / Gertrud Troester THOROPHONE CTH2408 (2000)
“Jongara” für Mandoline solo / Vogt &Fritz VF4027 (2002)
Federazione Mandolinistica Italiana WEBページ

詩的想起「優雅なリュート」 “Liuto gentile”, Evocazione Poetica... (1925)

Rosalio Gargano



作者は1879年1月イタリアのカタニアに生まれ、1962年7月スイスのベリンツォーナに逝いたマンドリニスト、指揮者、作曲家。17歳でマンドリニストとしてのキャリアをスタートし、トリエステでは”Estudiantina dell’Unione Ginnastica”の監督をつとめ成功をおさめており、同地の権威ある新聞には「驚異的な俊敏さと優しいタッチがガルガーノを偉大なマンドリン奏者にしている」と評されている。作曲家としての作品はマンドリンのみならず管弦楽曲、協奏曲、オペラなど多岐にわたった。一方ベリンツォーナのマンドリン合奏団でも指揮を務めた他、吹奏楽団の監督や聖歌隊長を歴任した。また1929年から1945年までは同じスイスのピオッタ映画祭の 監督を務めるなど様々な音楽活動に深く根を下ろした活動をしていた事が伺われる。

マンドリン関係の作品はヴィタ・マンドリニスティカ、イル・プレットロ、イル・コンチェルト各誌で1900年代初期、多くのコンクールに入賞し掲載された。中でもイル・コンチェルト誌の作曲コンクールで一等銀牌を獲得した幻想的小詩「飛行士」や行進曲「東郷元帥」は有名で、他にも３パートのマンドリンとマンドラという珍しい編成で書かれた「夕べの祈り」等がある。

©Plectrum Music Institute, 2024

本作はイル・プレットロ誌で1925年に掲載されたもので、ガルガーノの作品でマンドロンチェロ、コントラバスが含まれた六部編成の作品は前述の「飛行士」と本作のみである。タイトルから優美な緩徐作品と思いきや、なかなかに勇壮な一面を持つ行進曲的な一面を持っている。中間部のラルゲットの美しさはガルガーノのメロディメーカーぶりが発揮されている。楽譜の冒頭にはM.フォレージの詩の一節から「泣いても笑っても愛の味がする私のマンドリンが、あなたにキスを贈る…。」と書かれている。

「無言歌」 “Romanza senza parole” (1908), Op.84

Calogero Adolfo Bracco

作者はイタリアのマンドリニスト、ヴァイオリニスト、指揮者で作曲家。アマチュア管弦楽団、吹奏楽団やジェノヴァのマンドリン合奏団などで指揮者をつとめた他、1902年のイル・マンドリーノ誌による第6回作曲コンクールにおいて「マンドリンの群」が金牌を得て、6月に同誌に掲載されると、各地の合奏団から好評を博し、レパートリーとして定着していった。イル・マンドリーノ誌には1895年から作品を発表している。

作者について生年没年はおろか、そのフルネームさえも判然としないまま長い時間が過ぎていたが、1990年代に石村隆行氏が在伊中にイル・マンドリーノ1905年2号初版に作者の訃報記事を発見し、生年と没年が判明、2019年にカルロ・アオンツォ氏が調査の結果、公文書によりフルネームと正確な没日が判明した。それらによれば作者は1860年にピエモンテ州ビエッラに生まれ、1905年1月22日にジェノヴァに逝いた作曲家である事が判明している。



本作はフィレンツェのフォルリヴェージ社からパート譜として刊行されているが発行年は不明で、出版時の編成はピアノ伴奏またはギター伴奏の二種のパターンでマンドリンとの二重奏からマンドロンチェロ、リュートまで含む六部合奏まで多様な版が存在した。フォルリヴェージ社の創設者でもある作曲家G.ベルレンギに献呈されている。（ちなみにフォルリヴェージはベルレンギの妻の旧姓）。今回はマンドロンチェロを含む五重奏版にマンドローネ(コントラバス)パートのみ加筆している。

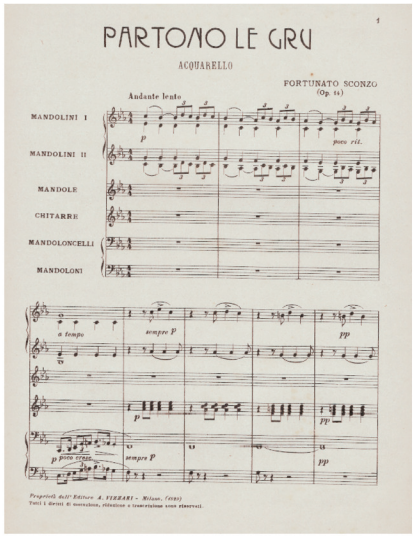
また、本作は1923年に武井守成の提唱で開催されたシンフォニア・マンドリニ・オルケトラ(S.M.O)主催の第一回全国マンドリン合奏団コンコルソの課題曲として選ばれている。何故本作がこのコンコルソの課題曲として選定されたかについては、「マンドリンとギター」誌に掲載された記事の中には見つける事が出来なかった。S.M.Oは1918年に本作を定期演奏会で演奏しており、武井は「今回は此人の最幽艶な旋律を御紹介しやうと思ひます。えは作品第八十四で彼の雄健な小交響楽「マンドリンの群」を耳にした人に取っては えが同一作曲家の手に成ったものか如何かを疑はしむる程美しい心地よい曲です。各パートの使用の飽くまで巧みな虚に何時もながら感嘆を禁じ得ません。」と評している。

なお、このコンコルソにおいて課題曲は五部の編成であった事から、中野譜庫に残されている手書きの総譜はその時に参加団体に対して配布されたものである可能性を考えておきたい。ちなみに当館で管理する市毛譜庫内には本コンコルソに参加した齋藤秀雄率いるオーケストラ・エトワールが往事に使用したと思われる本曲の手書きパート譜が残されている。

©Plectrum Music Institute, 2024

水彩画「鶴は飛び立つ」 “Partono le gru”, Acquarello (1929)

Fortunato Scozo

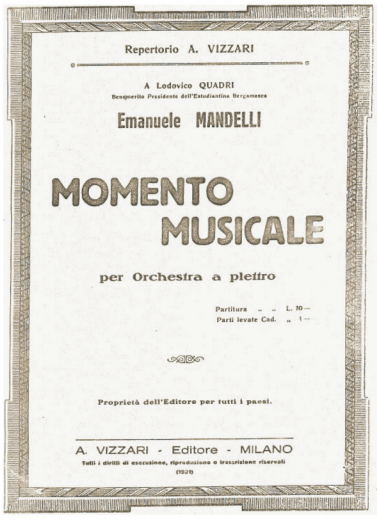


作者は1903年パレルモで生まれたフルート奏者、作曲家で没年は判明しない。同地のパトリオ音楽院でフルート、吹奏楽を学び、卒業後はG.ラ・ドゥーカ、B.ルビーノ、U.ボッタッキアリに作曲を学んだ。主にフルート奏者として活躍し、1930年には「フルートとフルート奏者～歴史と伝記」を出版した他、教則本やフルートの為の楽曲の制作に精力を注いだ。その後も「フルート総合演習」全８巻を出版するなどして名声を博した。フルートの為の作品には「ピッフェロとザンポーニャ(クリスマスなどに使用されるバグパイプのような楽器)」、「田園牧歌」等がある。なお、本作者に先んじてVincenzo Sconzoという作者がイル・コンチェルト誌に十数作を発表しているが関係については不明である。

本作についての由来はハッキリしないが、作者が弦楽の為の作品を残しているのが興味深い。他にも1920年代にイル・プレットロ、イル・コンチェルトに計4曲が確認されているが、本作は唯一六部編成で書かれている。本邦でも武井守成がオルケストラ・シンフォニカ・タケヰで1931年にいち早く取り上げ、「此れ小品は近来に於ける思ひがけない立派な収穫の一つで、描写の妙味が従来の伊太利型を脱している。」と述べている。師であるU.ボッタッキアリの作品のオマージュと感じられる一節がさりげなく埋め込まれているのも興味深いが、殆ど演奏されたという話を聞かない秘曲のひとつと言える。

「楽興の時」 “Momento musicale” (1931)

Emanuele Mandelli



作者は1891年4月にベルガモで生まれ、1970年3月ミラノに逝いた作曲家、指揮者。ミラノ音楽院に学んでいる間に第一次大戦に大尉として従軍、その後パルマ音楽院に戻り1920年に首席で卒業した。1923年から30年までベルガモのドニゼッティ音楽院で教鞭を取り、同地では聖マリア・マジョーレ教会の楽長も務めた。その後はミラノに移住しスカラ座で指揮者として活躍したが第二次大戦が始まると再び戦地に赴き作曲を中断せざるを得なかった。戦後はその職に戻ったとされる。作品は劇場作品、管弦楽、ピアノ曲、合唱曲などを残しており、管弦楽作品には組曲「聖フランチェスコの花」、交響的エピローグ「ミラ・ディ・コドラ」、「ピアノと管弦楽の為の幻想曲」、幻想曲「ラインの妖精」、吹奏楽の分野では「カルソ風夜曲」等があり、他に現在でもイタリアのカラーラ社からオルガン曲の「聖書組曲」「降誕祭の幻影」 など出版されている 。

本作は1931年にイル・プレットロに発表された六部（マンドリンは各二部に分割）合奏とティンパニの為の作品で、歴史あるマンドリン合奏団、エステュディアンティナ・ベルガマスカの会長ロドヴィ

©Plectrum Music Institute, 2024

ゴ・クワドリ氏に献呈されている。歌い過ぎず、濃密になり過ぎず、紙一重のところで陳腐なロマン派小品に陥らないのは作者が多くのオルガン曲、宗教曲を作曲している事と無関係ではないように思われる。まさに天国的な美しさを持つ名曲と言える。

第３部ではここ旧東京音楽学校に縁(ゆかり)のある山田耕筰と橋本國彦、そして彼らの作品とマンドリン楽界を繋いだ中野二郎の作品を演奏する。

山田耕筰は言うまでもなく日本の洋楽を切り開いた嚆矢となった人物で、1886年に生まれ、1904年に東京音楽学校に入学しその後4年間のベルリン留学を経て、日本初の交響楽団・東京フィルハーモニー管弦楽団を結成して日本の管弦楽の始祖の一人となった（もう一人の始祖には大沼哲がいる）。一方、橋本國彦は1904年に生まれ、1923年に東京音楽学校に入学しウィーンに留学、シェーンベルクに学ぶなど洋楽界きってのモダニストとして活躍した。山田の同時代の作曲家にはライバルと言われた信時潔がおり、橋本は信時に師事している。

二人の間にはいくつかの共通点がある。二人とも東京市本郷の生まれだが、山田は中学時代に関西学院で音楽の基礎を学び、橋本も育ちは大阪の北野中学時代から作曲を始め、当時楽譜を山田に送って指導を仰いだという。共に音楽のスタート地点は関西であった。挫折を味わい、移り住んだのは共に湘南の地である。

二人は大東亜戦争当時、山田は楽壇の重鎮として、橋本は信時に推されて立った東京音楽学校の主任教授として、共に戦時体制に協力する作品を多く書かざるを得ないという立場にあった。しかし、終戦後の音楽界は「戦時体制に協力した音楽家」の責任を追求する声が高まり、二人はその矢面に立たされる事となる。政治的手腕に優れた山田はこの難局を逃げきったのに対し、音楽家としての立場しか持たない芸術家肌の橋本は逆境に陥り、母校を辞す事態に追い込まれた。美術界の横山大観と藤田嗣治の立場に似たものを感じる方も多いかもしれない。

その後も華々しく活躍した山田に対し、橋本は虚脱感の中いくつかの名曲を残すも、1949年に僅か44歳で胃癌の為帰らぬ人となる。しかし山田が成田為三や清瀬保二を育てたように、橋本も芥川也寸志、黛敏郎、矢代秋雄、団伊玖磨（団は両者に師事）という次世代の作曲家たちを産み出した。橋本の功績は微塵も色あせる事がない。

中野二郎は二人の生まれ年の間、1902年に愛知県瀬戸市に生まれて、工業学校の助手をしながら独学で音楽を学んだ。上記の二人が歩んだキャリアとは全く無縁の田舎育ちであったが、マンドリン、ギターを独習し自らのキャリアをこつこつと積み上げながらJOCK(NHK名古屋)の放送管弦楽団の指揮者に就任し、作曲家としても多くの独奏、合奏曲を作り続けた。
中野はマンドリンやギター以外に、北原白秋らが始めた「赤い鳥」童謡運動に魅入られて、こどもの為の音楽を愛したが、そんな中野が数多くの童謡や子供の為の音楽を産んだ山田や橋本の音楽に目を向けない筈もなく、その音楽に深く共感し、マンドリンの世界に彼らを紹介する

©Plectrum Music Institute, 2024

事となる。中野は百曲選の刊行終盤に差しかかり、1972年に「日本の郷愁」という曲集をまとめている。その中には山田の「からたちの花のワルツ」「夢の桃太郎」、橋本の「若人よ」「幌馬車」の他自作の「丘の教会堂」「毬つき遊び」等が収載されている。同曲集に附された「いる・ぷれっとろ第16集」で中野は山田の作品への賛辞と共に、橋本に対して「深く彼の楽才のとりこになっていた」と記している。

本日のステージではこの曲集の中から3曲を選び、イル・プレットロ誌にも中野によるギター編曲が掲載された「静かな午后」の中野による合奏編曲を併せてお聴きいただくものである。

行進曲「若人よ」 (1937)

橋本國彦 / 中野二郎 編曲



作者は1904年9月東京市本郷に生まれ、1949年5月鎌倉に逝いた作曲家、ヴァイオリニスト、指揮者、教育者。北野中学(現大阪府立北野高等学校)時代にヴァイオリンを辻吉之助に師事し、1923年東京音楽学校に入学。ヴァイオリンを安藤幸に学び、本来希望していた作曲については信時潔に進言を受けながら独習で習得。作風はフランス印象派的な作品や新ウィーン楽派風な作品、微分音による新感覚な作品を発表、軽音楽の作編曲などもこなした。1929年東京音楽学校講師に就任、ヴァイオリンの弟子に朝比奈隆がいる。

1933年、信時潔に推され、29歳にして新設された東京音楽学校本科作曲部の教授に就任。門下生には芥川也寸志、黛敏郎、矢代秋雄、団伊玖磨、江文也、清水脩らがいる。1934年には文部省留学生としてウィーンに留学、E.ヴェレシュに師事し、E.クルシェネクやA.ハーバにも教えを請うた。帰国途中のアメリカでは亡命中だったA.シェーンベルクにも師事し、脱ロマン派の音楽を学んだ。

帰国した1937年に盧溝橋事件が発生し、支那事変が勃発。立場上、戦時歌謡や戦争賛美的な作品製作に従事した。戦時中の1940年には「模範音楽通論」を下総皖一と共著で刊行している。（同書は版を重ね、現在でも出版されている。）

戦後は「戦時体制協力者」として糾弾され、職を辞した（後任は伊福部昭）。その後は鎌倉市極楽寺の自邸で蟄居し、戦火に倒れた人々を追悼するために独唱と管弦楽のための「三つの和讃」、日本国憲法の公布を祝う「交響曲第2番」などを発表しながら再起の道を探ったが1949年、胃癌のため44歳で逝去した。

本作は1937年に吹奏楽曲として発表、ほぼ同時に女声合唱を附した版が作成され翌年の「総合女子音楽体育大会～五万人の大合唱」で発表された。中野二郎は橋本の楽才に惚れ込み数点を編曲したと書き残しているが、この中野二郎編曲版は合唱譜から作成したと書かれている。今回は間引かれた和声構成音やアーティキュレーションを補筆し、トリオの後半部分は吹奏楽版及び合唱版に準拠して校訂した。中野編曲版は奇しくも橋本が没した1949年に名古屋マンドリン楽団によって演奏されている。

©Plectrum Music Institute, 2024

「静かな午后」“Siesta”(1916)　　山田耕筰 / 中野二郎 編曲



作者は1886年6月東京市本郷に生まれ、1965年12月成城に逝いた作曲家、指揮者。1899年岡山の養忠学校(旧岡山県立金川高等学校)に入学し、義兄で宣教師のエドワード・ガントレットに西洋音楽の指導を受けた。翌年関西学院中学部に転校し、グリークラブで活動、在学中に処女作の“MY TRUE HEART”を作曲した。同校を中退し、1904年東京音楽学校予科に入学、三浦環に声楽を師事し、1908年に本科卒業後は研究科でチェロと楽理を学んだ。

1910年から3年間、三菱財閥の総帥岩崎小弥太の援助を受けドイツに留学、ベルリン高等音楽学校(現ベルリン芸術大学)作曲科に入学した。同校でM.ブルッフやK.L.ヴォルフに師事、1912年に日本人として初の管弦楽曲を作曲した。1915年帰国後は岩崎小弥太によって組織された東京フィルハーモニー会に、管弦学部を創設した。またこの管弦楽部首席指揮者に任命されたが、情事で翌年解散させられる。1925年には近衛秀麿と共に現在のNHK交響楽団の前身である日本交響楽協会を結成したが、金銭問題で近衛とは仲違いし分裂状態となった。

翌年茅ヶ崎に居を移し、再起を目指す中では「赤とんぼ」などの童謡の名曲が数多く誕生している。1936年にはフランスのレジオンドヌール勲章を受章、1937年にはドイツ宣伝省の招請でドイツを訪問し、ベルリン・フィルを指揮している。

1940年、戦時色が強まると演奏家協会を発足し、自ら会長に収まると一気に政治色を強め、1941年に情報局管轄下の「日本音楽文化協会」の副会長に就任した。その後はナチスのKDFに範を取った「音楽挺身隊」を率いて占領地での音楽指導に携わっている。しばしば軍服で行動していた事もあり、戦後は「戦時体制協力者」として糾弾されたが（音楽戦犯論争)、山田は「戦時中、国家の要望に従ってなした行為が戦争犯罪となるなら、日本国民は挙げて戦争犯罪者になってしまう」と一蹴し、自らの責任を否定する論陣を張った。1948年、脳溢血で倒れた後は左半身付随となったが、1950年、日本指揮者協会会長に就任、1956年、文化勲章を受章。1965年心筋梗塞により逝去した。本作は1916年に書かれた10曲からなる山田の最初のピアノ小品集「子供とおったん」の第6曲。山田がドイツから帰国した後に寄宿していた姉の家で過ごした幼い甥と姪との穏やかな一日が描写されており、「おったん」は3歳の姪が山田を呼ぶ際の発音による「おじさん」の事で、山田曰く「太陽と一番仲のいい子供たちに教えられた事を書いた」との事である。


「静かな午后」に附されたイラスト

この第6曲には「玉や 玉ちゃん お前もかい？順ちゃんも美枝ちゃんもおねん寝よ！赤い蜻蛉のお守さん、お人形さあまもおねんねかい？」との詩が添えられている。お昼寝の子守歌といったところであろう。この時期山田は音楽と演劇が融合した「舞踊詩」の創作に没頭しており、黒い海水着を舞踊練習衣の代わりに着て庭を舞い踊る姿ははたから見れば狂人の様であったという記録がある。その一方で、姉と二人の子どもとの生活を通じて、初めて穏やかな家庭の存在に基づいた芸術に気づき、この小品集が生まれたという。1917 年出版の大阪開成館の楽譜では東京音楽学校から東京美術学校に転じて、山田と同窓で共に渡欧した美術家の斎藤佳三の挿絵が豊富に使用され、楽曲に一層柔和なイメージを与えている。

©Plectrum Music Institute, 2024

中野は1932年に本作をギター独奏に編曲し、これはイル・プレットロの1940年1号に掲載された。一方、1938年にはクラブ・ドメニカ・マンドリン五重奏団での演奏の為にこれを五重奏に、1973年にプレットロ・ロマンティコでの演奏に際し、六部合奏に再編し、自ら指揮にあたった。

「丘の教会堂」(1939/1941)

中野二郎

本作は1933年にギター独奏曲として書かれ、1939年にマンドリン五重奏に編曲され仙台アルモニアから出版された。その後1941年に名古屋マンドリン楽団での演奏が六部に準ずる編成の為、この時期にマンドローネ、バスパートが加えられたと考えられる。出版は当初平山英三郎編「マンドリン合奏曲集８」にパート譜が収載され、総譜はオーケストレーションを修正して中野自身が「日本の郷愁－Ⅰ」で発表した。アルモニアでの発表時、名古屋医科大学教授の永松博士に献呈と記されている。これは中野が、同博士主催の第四日曜会という集会にギターを持って参加し、多くの賛美歌に触れたことに由来する。また中野が一時期師事した日本合唱界の権威の一人、津川圭一の合唱曲に「丘の上の教会堂」があり、これに着想を得て作曲されている。

アルモニア版には『粉雪の降る黄昏 丘の上に小さな教会堂が立っている 祈りが終わると やがて楽しげな合唱の練習が聴こえて来る 降誕祭ももう間近だ 外は雪が寒い』という解説が見られる。今回の演奏にあたっては、冒頭などに現れる雪が舞い落ちる様の表現について、同志社大学で本作の演奏の際に直接中野から指導を受けた手嶋文彦氏から助言をいただいた。

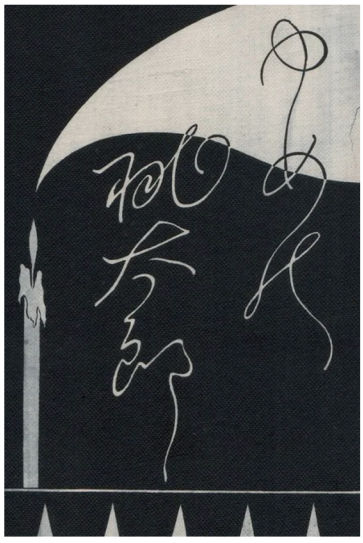
組曲「夢の桃太郎」(1921ca.)

山田耕筰 / 中野二郎 編曲

1, Prelude “夢路”
2, Minuettino “流の桃”
3, Waltz “誕生の喜”
4, Rondinetto “森のたはむれ”
5, Scherzando diablo “鬼が島”
6, Marcia trionfante “凱旋”

本作は全6曲で構成されるピアノ独奏の為の組曲で、自筆譜が未発見の為正確な作曲年は不明だが、大阪開成館出版の楽譜によると「守屋東姉に捧ぐ 1921年3月 東京にて 山田耕筰」と記されている。守屋東は山田耕筰が東京音楽学校に通っていた時のバイオリン専攻の同級生で、後の教育者、活動家である。

おとぎ話の「桃太郎」をテーマとした組曲であるが、様々な楽曲形式(Prelude, Minuettino, Walz, Rondinetto, Scherzo, Marcia)を日本の伝統音楽風に落し込んだ、なかなか手の込んだ曲となっている。というのもピアノの初歩を終えた子供たちにも弾くことが出来るよう、平易な技巧で書かれていながら、弾きながら上記の楽曲様式が学べるという仕掛けである。



工藤哲郎氏の「中野二郎とマンドリン」によると、1932年1月中野は山田耕筰の作品を数曲一気にマンドリン編曲しており、本作もそのうちの一つであったようだ。「流の桃」のみ1936年にクラブ・ドメニカ五重奏団の演奏でラジオ放送されているが、全曲は1942年、武井楽団(オルケストラ シンフォニカ タケヰ)によって演奏されているのが調べた範囲では最も早い時期の演奏だったと思われる。中野自身も1948年に名古屋マンドリン楽団で本作を指揮している。

©Plectrum Music Institute, 2024

参考資料：「マンドリンとギター」「マンドリン・ギター研究」各号 / オルケストラ・シンフォニカ・タケヰ
“Dizionario Universale dei Musicisti” / Carlo Shmidl, Sonzogno (1937)
“Dizionario dei Musicisti l’Italia, Musicale d’oggi ongara” / Albert De Angelis (1928)
Treccani, il portale del sapere – Treccani.it
「山田耕筰と美術」図録 / 栃木県立博物館 (2020)
ピアノ曲《子供とおったん》にみる山田耕筰 / 澤田まゆみ「音楽表現楽」Vol.15 評論論文
オーケストラ・ニッポニカ 設立演奏会プログラム / 片山杜秀 (2003)
「中野二郎とマンドリン」 / 工藤哲郎, 絃楽器のイグチ(2021)
名古屋パストラーレ合奏団WEBページ　日本の作曲家　橋本國彦
https://www.medias.ne.jp/~pas/hashimoto.html

MEMBRI DELL'ORCHESTRA COMMEMORATIVA

本演奏会の為に編成されたオーケストラで、普段はコンソルテ、プレクトラムソサエティ、浦和ギターマンドリンクラブ、ビアンカ・フィオーリ等に所属して活動しています。今回は8月から昨日まで練習に反省会にと賑やかに活動してまいりました。今宵はその成果？をご披露させていただきます。

- Mandolini Primi : 圓尾駿弥、石橋一彦、濱田佳穂、外尾未恵、堀地圭子、森中恒一郎 山田美樹
- Mandolini Secondi : 嶋田明菜、森真理、小澤佑一、田島泰子、中島淑乃、横澤有里子
- Mandole Tenori : 石井翠、北川輝彦、石澤聡美、小川弘晋、前田直徳、増田朱音、山本麻菜
- Mandoloncelli : 加藤智恵、石川美砂、作田真樹、田中毅、浜田洋行
- Chittare : 肥田栄治、大村慎一、清田和明、黒津奈美、都筑文子、富樫敦子、野口勇 宮崎純一
- Mandolone : 徳能総彦
- Contrabassi : 大石彰、箕田文夫
- Direttori : 横澤恒、小穴雄一

正会員募集

当法人ではマンドリン音楽資料館を運営し、マンドリン関連の楽譜、資料類の分類、整理、収蔵、公開を行なっています。私たちの運営に賛同して継続的にご支援いただける「正会員(個人・団体)」を募集しています。資料館を維持していく為には資料館の管理費、各種営繕費、水道光熱費等の維持費用の他、収納用品や各種機器の保守、レンタルサーバ利用などの事業活動費用が必要です。
当法人の活動に賛意をお示しくださる方からのご入会等ご支援を賜りますよう何卒よろしくお願いいたします。詳しくはホームページを是非ご覧ください。

https://www.mandolinmusiclibrary.com/membershipregistration

会員登録のページは
こちらからもどうぞ→

©Plectrum Music Institute, 2024